

米の無力と露のシリア介入：国際的外交回帰への分岐点？

【訳者注】The Saker は、このサイトの寄稿者の中でも、最も専門的な国際事情通の一人。この論文は冷戦終結後、今日までの世界の戦争小史とも、アメリカ覇権主義の暴走の歴史とも読める。これが極点に達したとき、ロシアのシリア介入という、わずか数時間の出来事によって歯止めがかかり、歴史の流れが逆転したと言う。この観点は他の論者にも共通する。

「プーチンの秘密兵器：真実」というセクションは特に注目に値する。プーチンは「帝国」に対して武器を使ったわけではない。常識と道理を説くことによって、皇帝が裸であることを堂々と指摘することによって、世界を覚醒させた。「彼は公然と米政権を、無能、無責任、嘘つき、偽善的、そして末期症状的に傲慢だと評した。」しかしこれが真理であると誰でも知っているがゆえに、この前代未聞の発言が功を奏した。

米露の争いは覇権争いではない。この惑星そのものに起こりつつある霊的革命としてのサタン側と神側の争いを見る、デイヴィッド・ウィルコックのような観点がなければならないだろう。

By The Saker

Global Research, October 25, 2015

国際法と外交の終焉

冷戦の終結が歓迎され、これで平和と安全の新しい時代が始まり、剣が鋤に作り直され、かつての敵が味方となり、世界は、普遍的な愛と平和と幸福の新しい夜明けを迎えるだろうと思われた。

もちろん、そんなことは起らなかった。起ったのは、アングロ-シオニスト帝国が、“冷戦に勝ち”自分たちが今、世界の——この惑星そのものの——支配者になったと思い込んだことだった。それが不可能なはずはなかった。なにしろ帝国は、700 から 1000 の軍事基地を世界中に築き（“基地”の定義によって数は変わる）、彼らは地球の全体を、“統括区”と呼ばれる、数カ所の排他的責任区域に分割してしまった。歴史上、どこかの権力が誇大妄想を働かせて、この惑星のさまざまな部分を異なった統括区に分けたのは、1494 年の法王権力による、有名な（悪名高い）「トルデシリャス条約」(Treaty of Tordesillas) のときだった。

https://en.wikipedia.org/wiki/Treaty_of_Tordesillas

その見方を十分に明らかにしているのは、この帝国が、一つの例を作ろうとして、小さなユーゴスラビアに権力を行使したときである。「非同盟運動」の呼びかけメンバーであるユーゴスラビアが、悪意をもって攻撃され、バラバラにされ、それが、大半セルビア人の膨大な避難民の波を創り出したが、世界の民主的な文明国家は、ほとんどこれを無視した。その上、帝国は、もう一つの戦争を、今度はロシアで起こし、この戦争が、半昏睡状態のエリツィン政権を、後にアルカーイダの中心となった ISIS や Daesh (チェチュニアのワハビ派) と戦わせた。またしても、何十万という“目に見えない避難民”がこの戦争から発生したが、これもまた、民主的で文明国の世界、特にロシア民族からほとんど無視された。ロシアが、このワハビ-タクフィリ反乱を、最終的に鎮圧するのに 10 年かかったが、結局はロシアが勝った。そしてその時まで、アングロ-シオニストは注意を別のところに移していた。すなわち、アメリカとイスラエルという“深層国家”が合同して、9・11 ニセ旗作戦を計画し、実行し、これが彼らに“テロに対する地球的戦争”を行う口実を与え、それがまた、アングロ-シオニストに 007 流の“殺しのライセンス”を与えた——ただこの場合、ターゲットは人物でなく国家全体だった。

その後どうなったかは誰でも知っている——アフガニスタン、フィリピン、ソマリア、エチオピア、スーダン、イエメン、マリ、パキスタン、シリア、リビア、ウクライナ、そのどこでもアメリカが、公然と、あるいは隠れて戦争をしている。そのやり方は多様で、アフガニスタンなどの完全な国家侵略(未遂)から、さまざまなテロ集団への支援(イラン、シリア)、それにナチ政権の全面的な財政援助と運営(ウクライナ)にまで及んでいる。アメリカはまた、シーア派に対する長い遠征で、ワハビ派に全面的な支援を与えている(サウジアラビア、バーレーン、イエメン、シリア、イラン)。これらの戦争に共通しているのは、それが完全に違法だということ——アメリカも、そのどんな臨時の代替“同盟有志国”も、国連安保理にとって受け入れ可能だった。

ここでもすべての人——特にセルビア人の爆撃に喜んだムスリムたち——が忘れてならない重要なことは、こうしたすべてが、完全に違法なユーゴスラビアの破壊に続いて、それ以上に違法な、セルビアの爆撃から始まったことである。

もちろん「帝国」もまた、わずかの屈辱的な敗北を喫したこともある——2006 年には、ヒズボラが、イスラエルに対し、現代史で最も屈辱的な軍事敗北の一つと言えるものを与えた。また 2008 年には、真に英雄的なオセチアの小さな軍勢が、比較的小さなロシアの遊撃隊(ロシア正規兵はほんのわずかしかなかった)に援護され、アメリカの訓練した、アメリカ援助によるグルジア(ジョージア)軍を完全に叩きのめした。この戦争は 4 日で終わった。それでも全体から見れば、21 世紀の最初の 10 年は、ジャングル法が国際法に勝利し、前から続いた“力は正義なり”の原理が完全にまかり通った。

論理的に言って、これらの年月は、アメリカの外交が基本的に存在しなくなった期間でもあった。米外交官の唯一の機能は、最後通牒の「応ずるか否か」を手渡すだけになり、帝国はすべての交渉を全くやめてしまった。ジェイムズ・ベイカーのような年季の入った老練の外交官は、マデレーン・オールブライト、ヒラリー・クリントン、サマンサ・パワーのようなサイコパスたちか、ジョン・ケリー、スーザン・ライスのような、凡庸な人物に取って代わられた。結局、脅しつけ、怒鳴りつけて最後通牒を渡すのに、外交の心得など何の必要があるのか？ 事態があまりにもひどくなったので、ロシア政府は、彼らのアメリカの同僚の「プロの品位の欠如」を公然と嘆いた。

国際法の規範が守られるべきだと熱心に主張するロシア政府にとっては、彼らは絶望的に時代遅れだった。私は、ヨーロッパの政治家をここであげようとも思わない。ロンドン市長のボリス・ジョンソンは彼らを、「偉大で、無関心な、原始的無脊椎動物のクラゲのようだ」と言ったが、その通りである。<https://www.youtube.com/watch?v=LI5oRTL-6rA>

しかしそれから、何かが変わった——劇的に。

武力の失効

突然、すべてがうまくいかなくなった。あらゆるアメリカの勝利が、なぜか敗北に変わった。アフガニスタンからリビアまで、一つひとつのアメリカの“成功”の様子が、どうしてかわり、残った最後の選択とは言わないまでも、最上の選択が“勝利を宣言して逃げる”ことに変わった。「いったい何が起ったのか」という当然の質問が浮上する。

第一の明らかな結論は、米軍とそのいわゆる“同盟軍”が、駐留する余力をほとんど持たないということである。彼らは当然ながら、他国を侵略することはうまいのだが、そのあと急に、その大部分を支配できなくなる。一国家を侵略しても、それを統制することができず、その再建などもってのほかである。アメリカに従った“同盟有志国”は、結局、ほとんど何もやってもらえなかった。

2番目に明らかになったことは、負けたと思われていた敵が、実は隠れていただけで、戻って復讐する好機を待っていたのだった。イラクがその完全な例である。本当に“負けた”どころか、イラク軍は（賢明にも）いったん解体し、恐ろしいスンニ派の反乱の形を取って戻ってきて、徐々に ISIS に変形していった。しかしイラクが唯一のケースではなかった。同じことがかなり方々で起こった。

そういう考え方に反対し、アメリカは、ある国を支配しても破壊しても、一方が“勝つ”のでさえなければ、どちらでもよいのだと言う人たちがいる。私はそうは思わない。確かにアメリカはいつでも、敵方の完全な勝利よりは、一国の破壊を望むだろうが、アメリカは、もし可能なら、一国を支配することを望んでいないわけではない。言い換えると、一国が混乱と暴力の中に沈んだとき、それはアメリカの勝利でなく、明らかにアメリカの敗北である。

アメリカが見落としているのは、**外交が力の行使をもっと効果的にする**ということである。第一に、注意深い外交によって、集団行動を支持しようとする諸国家の、幅広い同盟を取り付けることが可能になる。第二に、外交によって、公然と集団行動に反対する国家の数を減らすこともできる。シリアが現に、「砂漠の嵐」作戦でサダム・フセインを倒そうとする米軍に、支援の軍隊を送ったことを、覚えている人があるだろうか？ 確かにそれは大した力にはならなかった。しかし彼らの存在は、アメリカに、シリアは少なくとも公然と米政策に反対はしないだろうという、安心感を与えた。シリア政府に「砂漠の嵐」を支持させることによって、ジェイムズ・ベイカーは、イラク政府に、これは反アラブだとか、反ムスリムだとか、反バース党同盟だとさえ、言わせないようにした。そして彼は、サダム・フセインが完全に孤立しているように見せかけた。第二に、外交は、使われる全体的な戦力の量を減らすことを可能にする。なぜなら、本当はビジネスを望んでいることを敵に示すために、“即席の過剰殺戮”は必要がないからだ。第三に、外交は、合法性を勝ち取るために必要な手段で、合法性は、長期の延ばされた戦闘に関わるときに、決定的に重要である。最後に、外交努力の成功から得られた合意は、軍事努力に対する民衆の支援が急速に低下するのを防ぐ。しかしこうしたファクターのすべてが、今、急ブレーキのかかった“テロとの地球的戦い”や“アラブの春”革命を実施しているアメリカによって、無視されている。

ロシアの外交的勝利

今週は、ロシアにとって真の外交の勝利の時だった。それは、ロシア、アメリカ、トルコ、およびサウジアラビアの外相が、ウィーンに集まった金曜日の、多方向的交渉において極点に達した。この会合が、アサドのモスクワ訪問の直後に行われたことは、Daesh (ISIS) とアルカーイダのスポンサーたちが、今や、モスクワの条件に従って交渉することを、強いられていることをはっきり示している。どのように、それは起ったのだろうか？

ロシアのシリアでの作戦が始まって以来、私が何度も繰り返しているように、現実にはシリアへ送られたロシア軍戦力は、ごくわずかである。確かにそれは非常に効果的だった。しかしそれでも非常に少ない戦力だった。実は、ロシア国家院 (Duma) のメンバーの発表によると、作戦全体の戦費は、おそらく、“演習”に当てられる枠内で、ロシア防衛省の通常予算の中に収まる程度である。しかしロシア政府が、この小さな介入で達成したことは、軍事的

観点のみならず、特に**政治的**観点からも、かなり驚嘆すべきものだった。

帝国側が（不承不承だが）、アサドが、かなりの将来まで権力の座にいななければならないことを、受け入れざるを得なかっただけでなく、ロシアは現在、徐々に、しかし厳然として、真の地域的連帯を築きつつあり、彼らは、シリア政府軍と同じ側に立って **Daesh (ISIS)** と戦おうとしている。ロシアの作戦が始まる前から、ロシアは、シリア、イラン、イラク、そしてヒズボラの支持を得ていた。クルド族もまた基本的に、ロシアとアサドの側に立とうとしている兆候がある。金曜日には、ヨルダンもまた、ある程度の、まだ特定されていない軍事行動をロシアに合わせて取ることを、そして、ある特別の統制センターがアンマンに設立されることが発表された。 <http://russia-insider.com/en/military/jordan-joins-russian-coalition-against-isis-sets-coordination-center-amman/ri10703>

またエジプトも、ロシアのリードする連盟に加わる意欲をもっているという、有力な噂がある。またロシアとイスラエル政府も、軍事レベルでは、相互に直接、話し合おうという特別の方針を築いた。最低限言えることは——それぞれの国の誠実さの差はあっても、**この地域のあらゆる者が、少なくとも、ロシアの努力に反対はできないという強いプレッシャーを感じている**。これはそれ自体で、ロシア外交の非常に大きな勝利である。

プーチンの秘密兵器：真実

現在の情勢はもちろん、“地球的覇権者”にとっては、全く受け入れがたいものである。アメリカのリードする 62 カ国の連盟が、その根拠を示すことなく、2 万 2000 回もの爆撃を行ったのに対し、比較的小さなロシアの連盟が、帝国を完全に押しつけ、そのすべての計画を無効にしてしまったのである。しかも、プーチンが、そのアメリカとの代理戦争で用いた最も恐ろしい兵器は、軍事的な兵器ですらなく、単に真実を語ることだった。

彼の国連演説においても、今週の Valdai 会議の演説でも、プーチンは、他のどんな世界的リーダーも、あえてやったことのないことをやった——彼は公然と米政権を、無能、無責任、嘘つき、偽善的、そして末期症状的に傲慢だと評した。このような公的な軽蔑は、世界中に極めて大きいインパクトを与えたが、それはプーチンがそうした言葉を使う前に、ほとんど誰もが、それが完全に真実だと知っていたからである。

<http://thesaker.is/un-70th-general-assembly-live-vladimir-putin-speech/>

<http://thesaker.is/18960/>

アメリカはそのすべての同盟国を、“従僕” (vassal) として扱っており (Valdai 演説を見よ)、アメリカこそ、いま世界が直面させられている、すべての恐ろしい危機を創り出した

主犯である（国連演説を見よ）。プーチンの功績は基本的に言って「皇帝は裸だ」と言ったことである。これとは対照的に、オバマのしどろもどろの演説は滑稽で憐れだった。いま我々が目撃しているのは、驚嘆すべき“どんでん返し”である。アメリカが推進してきた「力は正義なり」という原理が幅を利かせた数十年の後、突然、我々は、どれほどの軍事力があっても、包囲されたオバマ大統領には全く役に立っていない、という状況を目にしている。あなた自身が間抜けに見えるとしたら、12隻の航空母艦が何の役に立つだろうか？

1991年以後は、たった一つ残った超大国が、あまりにも強力で無敵だったので、外交とか国際法の順守といった些末事は、気にする必要がないかのようにだった。アンクル・サムは、自分が唯一の支配者で、この惑星の覇権者のように感じていた。中国は“大きなウォールマート”であり、ロシアは“ガソリン・スタンド”であり、ヨーロッパはプードルに過ぎなかった（後者は残念ながらその通りだ）。不敗のアメリカという神話は、まさにその通り、神話だった。第二次大戦以来、アメリカはたった一つの本当の戦争にも勝っていない。（グレナダとパナマはそう呼べない。）実は、米軍はアフガニスタンで、あの訓練不足、装備不足、食糧不足、資金不足の、ソ連の第40部隊よりも遥かにまずい戦績を残した。ロシア軍は少なくとも、主要都市と主要道路をすべてソ連の支配下に置き、この国の市民インフラストラクチャーをかなり発達させた（これをアメリカが2015年の今も利用している）。にもかかわらず、アメリカの不敗神話が本当にガラガラと崩れ始めたのは、ロシアが2013年に、アメリカのシリア攻撃を、外交と軍事の両手段で防ぐことによって、これにストップをかけた時だった。アンクル・サムは青くなったが、それをどうすることもできず、キエフにクーデタを起こし、ロシアに経済戦争を仕掛けるしかなかった——その両方とも目標を達成できなかったが。

プーチンはどうかといえば、彼はアメリカのあらゆる努力によって目的を挫かれるどころか、アサドをモスクワに招いた。

もう一つのアメリカの無能の指標としての、アサドのモスクワ訪問

今週行われたアサドのモスクワ訪問は、驚嘆して余りあるものだ。ロシアが、うぬぼれたアメリカの情報部に何も気づかれずに、アサドをシリアから連れ出し、モスクワに導き、また返すのに成功しただけでなく、ほとんどの国家首脳と違って、アサドは、ロシアの最も力ある人々の何人かと面談した。

第一にアサドは、プーチン、ラヴロフ、それにショイグと話した。彼らは延々3時間も話し合った。（このこと自体が驚くべきことである。）後にそこへメドベージェフが加わり、彼らは私的に会食した。そこにさらに誰が加わったか？ ロシア対外情報局長ミハイル・フラド

コフ、それにロシア安全保障会議議長ニコライ・パトルーシェフだった。

通常は、外国首脳は、フラドコフやパトルーシェフのような人々と、直接的に会うことはなく、それぞれの専門家が送られる。しかしこの場合には、議論された話題があまりにも重要だったので、1) アサド自身がクレムリンに赴き、2) クレムリンのすべてのトップ役者が同じテーブルにつき、アサドと直接的に議論を交わした。

当然ながら、この会談の一言も外へ出ることはなかった。しかし、何が議論されたかについて、出回っている主な説が2つある。

第一の説は、アサドは、はっきりと、彼の権力はもう終わりだと告げられ、辞職せよと言われたというものである。

第二の説は、全く正反対で、アサドが連れてこられたのは、彼とアメリカに向かって、彼がロシアの全面的支持を得ていることを知らせるため、というものである。

私は、このどちらも正しいとは思わない。しかし第二の説の方がおそらく真実に近いと考える。結局、もしその目標が、アサドに辞職せよということなら、単純に電話をかけるだけで十分だっただろう。ラヴロフが訪問するだけでよいかもしれない。“アサド支持”はどうかと言えば、それはロシア政府がずっと言ってきたことと完全に矛盾することになる——彼らは、アサドを唯一の合法的なシリア大統領として認めはするが、アサド個人を支持しているのでなく、シリアの権力者を決める、シリア国民の権利を支持しているのである。そしてそれは、ついでながら、アサド自身も合意していることである（これも、プーチンによれば）。

そうではない。私は、アサドとプーチンの会見は、少なくともその一部は、アメリカと他のいわゆる“シリアの味方”にメッセージを送って、“アサドは辞職せよ”計画が失敗したことを知らせるためだとは考えるが、このロシアのすべてのトップ・リーダーとの密室会談の主たる目的は、もっと別の所にあると考える——私の推測では、論じられていたのはロシアとシリアの長期的同盟であり、シリアが過去においてソ連と結んでいたような同盟関係を、正式に復活させたいということである。このような同盟の正確な文言は推測するしかないが、この計画は、おそらくイランとのそれに合わせて、2つの主要な側面をもつと推測する

-
- a) 軍事的側面：Daesh (ISIS) は撃滅しなければならない。
 - b) 政治的側面：シリアがアメリカの支配下に陥ることは許されない。

ロシアの軍事作戦が、ほとんどのロシアの専門家によって、ほぼ3カ月続くと想定されていることを考えると、ここで我々が考えねばならないのは、それとは別の中長期計画で、これは、ロシア、イラン、およびイラクが共同で Daesh と戦っている間に、シリア武装軍が再建されるべきことを要求する。そして実際、金曜日には、イラクが、ロシア軍に、イラク領内の Daesh を攻撃する権限を与えたという発表があった。確かに、ロシアの作戦が、アメリカの偽善と無能によって麻痺状態になっていた地域のために、触媒のように働き、Daesh の滅亡が見えてきたように思える。 <http://russia-insider.com/en/military/iraqi-government-authorizes-russia-strike-isis-iraq/ri10701>

祝うのは早すぎるが、確かに分岐点ではある

とはいえ、祝うには早すぎる。ロシア政府がそれを、自分たちだけでやるわけにはいかない。そして、シリアとその同盟国が、小さな町ごとに一つずつ、Daesh と戦うことが要求される。地上軍でなければ、本当にシリアを Daesh から解放することはできず、本当のイスラム教徒だけが、Takfiri イデオロギーを打ち負かすことができる。これには時間がかかるだろう。

さらに言えば、ロシアが“勝者”のように見えるのを阻止しようとする、帝国の決意と能力を過小評価するのは無責任であろう。これは、何世紀もの帝国主義の傲慢と無知の中で養われた、アメリカの帝國的エゴが、とうてい耐えられない事態であろう。結局のところ、どうして“不可欠の国家”が、世界が自分を必要とせず、他の者が公然と自分に反対し、勢力をもつことを、受け入れられるだろうか？ 我々はアメリカが、その（いまだに巨大な）権力を行使して、あらゆるロシアとシリアの率先行動を挫折させ、破壊するものと予想することができる。

とは言っても、最近のいろんな出来事は、“力は正義”の時代が終わったこと、アメリカが“不可欠な国家”だとか、世界の覇権者といった観念が信用を失ったことを、はっきり示している。闇の中の数十年の後、国際的外交と国際法が、再び意味をもち始めた。私の希望は、これがある過程の始まりであって、アメリカが、これまで非常に多くの国（ロシアも含めて）が経験してきた同じ革命を、経験してくれることである——帝国から再び“通常の国”へ。残念だが、2016年の大統領選運動を見ていると、これがまだ、かなり長い路程になりそうな感じを私はもつ。